

子守（大和い手向五字）

へオヤツかな何としよえ アイタツタツタ 膝頭を擦りむいた 憎い鳶づら油
揚げさろうた へオオオ泣くな良い子じゃこんな物やろな お月様いくつ十
三七つ まだ年いかぬ山出しが へわたしやどうでもこうでも あの人ばかり
はあきらめられぬ じゃによつて讃岐の金比羅さんへ 願でも掛けましよう
か 仇口の へ花さえ咲かぬ生娘の 枝姿振りもぶつきらぼう へ鼻緒切ら
して片々提げて がつくりそつくり みどり子下してこれからは

へ並べたてたる人形店 サアサ安売りじゃ 何でもかでも選り取りじゃ
みどりはかむろ紅は 花の姿の姉様を 口説文句は浄瑠璃で 聞き覚えたを
そのままに

へほんに思えばあとの月 宵庚申の日待ちの夜 甚句踊りや小唄節 数ある
中にこなさんのお江戸でいわば勇み肌 好いた風じゃと背戸家から 見かじ
り申してなま中に 気もあり松の藍紋り へ色に鳴海と打ち明けて 晚げ
忍んで来めさるならば コレナ嬉しかろではないかいな なぞと浮かれて座頭
の坊へ 冴えた月夜にやみ市ではないかいな やみ市なりやこそ真つ黒な炭屋
のお客と行くわいな 座敷で何をひかんすえ 盆の踊りになまめかし

へお前越後か私も越後 お国訛が出てならぬ

へ新潟出る時や涙で出たが 今は新潟の夢も見ぬ オ、イ船頭さん寄つて
かんせの 戻りに鯨でも積んでこんせの 踊りおどらば品よく踊れ 品の良い
のを嫁にとろ 松前殿様持ち物は いかたこなまこに珍の魚 寄らしゃんせ

エ、エ、エ、ナ 面白やへ ますます鳶めとろるとは 太い奴と豆腐屋へ 子を引
きかたげて 急ぎ行く